

たためである。

<3><1>、<2>より、宅地化の進展に排水施設の整備が遅れをとったことが、水害の増大をもたらした大きな要因となっているということがいえる。

したがって、すでに宅地化のかなり進展した本流域での水害防止対策としては、排水施設の十分な整備がすみやかになされるべきである。

<4>しかし、排水施設によって氾濫をなくすことは不可能であり、また、それにたよることは極めて危険である。したがって、氾濫の発生を防ぐのではなく、氾濫が起きたときにそれによる被害が発生することを防ぐのが、水害防止対策として有効な方法であろう。

すなわち、これまでのように社会条件のみに左右された土地利用ではなく、土地条件を十分考慮に入れた適切な土地利用が行われることが重要であり、今後宅地化の進む地域は、排水施設の宅地化に先行した整備とともに、こうした方向での対策が進められるべきである。

市川市の住宅地形成に関する考察

畑 裕 子

(1) 研究の目的と方法

首都圏の拡大に伴い都市機能が周辺地域に進出し、郊外の都市化がますます勢いをつけて進展している。千葉県市川市は比較的都市化の遅れた東京の東郊地域に位置するが、千葉県の玄関口として、県内では最も早く住宅都市への道を歩み始めたといえる。

この研究では、まず市川市の東京の近郊都市としての変貌過程と、その首都圏の中での位置づけというものを明らかにし、住宅地化という点に焦点を当ててその性格を分析する。そしてさらに、市内の代表的住宅地である2地区をとりあげて、その比較研究という形で住宅地形成のメカニズムを考察する。

ここでとりあげる2地区は、もともと自然条件、産業構造が全く違っており、住宅地化の過程もその結果としての住宅地の景観も全く異質となっている。そのような違いを生み出した要因は何かという問いに対して、土地の自然条件の違い、高速度鉄道による都心への時間的距離の短縮化という観点から、分析を試みる。

研究の方法としては、まず市内を12地区に分けて、主に国勢調査の地方集計によるデータを中心にその地域性を明らかにすること、そして2地区の比較研究に際しては、各種データの分析と並行してフィールドワークを行なうことを柱とする。

(2) 研究結果のまとめ

市川市は、東京都区部に隣接しているため東京への人口、産業の集積とその周辺地域への拡大に伴って、比較的早い時期からその影響を受け、住宅都市化するようになった。しかしその都市化現象も、昭和50年あたりを境に次第に落ち着いてきており、国鉄線沿線の地域では人口減少もみられている。

市域があまり広くなく地域性にばらつきがないので、市内を3つぐらいに大別することができる。

北部は、農業的土地利用と住宅地の共存地域であり、小面積の農地転用の累積により旧集落を利用しての発展で、景観的には台地上の一戸建て住宅地を形成した。中部の国鉄線に沿った地域は、商工業地域と住宅地が混在しており、人口密度も世帯数もたいへん多いが、住居の種類としてはアパート、借家の多い地域である。最後に南部の海に面した地域は、低湿地という郊外住宅地としてはマイナスの条件をもつため、最近まで経済的繁栄からとり残されていたのだが、地下鉄東西線の開通と土地区画整理事業によって、その都心への近接性を生かしてでき上がった新興住宅地域である。

市川市の基本的性格は、都心への通勤者のベッドタウンということで、あらゆる点で東京の力に包含されている。商業も盛んではなく、市としての地域力は小さい。このような中で、市川市の住宅地形成に関わる要因について考えると、都心への通勤者の居住地という性格から、通勤の時間的距離ということが一番の条件となる。そういった意味でも、行徳地区に東西線が開通したことによる影響は大きいと言える。また、国分地区と行徳地区の比較により、その土地条件の違いによって新・旧集落の立地形態が違ってくると言うことが明らかになった。

鈴鹿山地北西部におけるカルスト

平 松 顕 子

○研究の目的・方向

鈴鹿山脈は、本州中部を占め琵琶湖一帯の地狭部を擁するという地理的・地形的位置により、日本海側と太平洋側の気候が相互に強く影響しあい特異な生物相を現出するが、北部では石灰岩の分布する地域となっている。地域の自然環境を総合的に把握する地理学研究への第1歩の試みとして、本論文ではこの地域におけるカルスト地形（近江カルストと称すもの）をテーマに選び、その生成環境の追求に主な目的を置く。研究方向としては、地形面を単位として捉え、カルストと相関関係にある準平原との問題について、両者の関連性を確認し、その関連性を利用してカルスト地形の生成過程を調査する立場をとった。そして更に、いかなる自然環境を形成しているかを、人文生態の展開の面から考察し、この生成環境の特性を浮き彫りにしようとした。

日本のカルスト地形をその地形面、標高から区分し、近江カルストの位置づけを行なった。そして地形の調査に当たっては空中写真を基に野外調査をし、一部地域においては計測を加えた。

○結 果

近江カルストは、古生代石灰岩に発達し、それは、西南日本内帯各地に点在し石灰岩台地を形成している一連のものと岩相的に生成を同じくする。山頂の高位カルスト、山麓の中位カルストの二面に渡るが、この階段状の地形面は第三紀以降の構造運動によりブロックに切断された隆起準平原面であると解析し、カルスト現輪廻の開始期を、その地形隆起とほぼ同時期と推定した。広く日本のカルスト地形と比較検討すれば、近江カルストの地形上の特色は、ドリーネの形態が円形の単純形を呈し、側壁急斜の樽状～漏斗状の小規模で深いものが卓越すること、高位カルストではドリーネ地が多数見